

**京都大学教育研究振興財団助成事業  
成果報告書**

平成 28年 4月 23日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 医学部・医学科

職名・学年 学部生・5年生

氏名 川口 駿

助成の種類	<b>平成28年度 ・ 若手研究者在外研究支援 ・ 国際研究集会発表助成</b>	
研究集会名	米国癌学会(AACR: American Association for Cancer Research)	
発表題目	Humoral factors of breast tumor environment may boost PD-1 and CTLA4 gene expression of T cells which has already been up-regulated by CD3/CD28 stimulation.	
開催場所	New Orleans Ernest N. Morial Convention Center, New Orleans, Louisiana, the	
渡航期間	平成28年 4月17日 ~ 平成28年 4月22日	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有( )	
会計報告	交付を受けた助成金額	300,000円
	使用した助成金額	300,000円
	返納すべき助成金額	0円
	助成金の使途内訳	渡航費・宿泊費:292,000円 空港税・航空保険料・燃油サーチャージ:約26,020円 学会の登録費:350\$ 以上に充当。
当財団の助成について	「国際学会でのポスター発表」という名目で、学部生にこれほどの大きな額の助成金をいただくことができる財団は数少なく、このような助成金が存在しなければ、学会に参加することは出来なかったといっても過言ではなかったと思います。このような貴重な経験をいただき、大変感謝致しております。京都大学のますますの御発展のため、今後とも同様の規模の助成が行われ続けることを、切に期待しております。	

此度は、京都大学教育研究振興財団からの助成金に恵まれたことにより、「AACR2016でのポスター発表」の機会を得ることができた。まずは、財団と寄附者の皆様方、ならびに京都大学付属病院乳腺外科学研究室や医学部教務等の関係者の皆様方の支援に、深く敬意を表したいと思う。新たな経験を得ることができた感謝の念を胸に、この成果報告書では、まず初めに、ポスター発表を含めた簡潔な学会の説明を、次に、学会で経験したことを、そして最後に、それを経て抱いた今後の展望を述べたいと思う。

米国癌学会(AACR)は、1907年に創設されて以来、その影響力を拡大し続けている世界最大規模の学会である。今回、私が参加したAACR学術集会2016は、1万から2万人ほどの研究者が一堂に会して講演や議論を行うなど、非常に活気に満ちたものであった。学会の内容は大きく分けられると、インパクトのある業績を遂げた、著名な研究者によるPlenary session、ある一つの研究分野の枠組みのもと、複数人のリサーチャーがそれぞれ30分程度のプレゼンテーションを行うMain symposium、その規模の小さなものとしてのMini symposium、学会後の晩に、最寄りのホテル等で開かれる懇親会としてのTown meeting、そして、私が行ったPoster sessionの他にも、研究者のキャリアに関する相談会や、リサーチに興味のある高校生への説明会、製薬企業や医療機器メーカーによる展示会、有名な癌学術誌の歴史展示などであり、非常に多岐にわたる中身の濃いものであった。Poster sessionでは、アブストラクトに沿って作成したポスターの前に3~4時間立ち会うことが義務となっており、そこに訪れる様々な研究者の質問に答える中で、しばしば本質的な議論に発展する。自分の興味のある分野だけでなく、学会を大いに賑わせる最新のトピックに触れることができる毎日は、ニューオーリンズという米国の中でも有数の古い街並みを持つ都市の中で、より一層彩られた。(下写真は、AACR2016の会議場)



最終日に臨んだポスター発表以外の時間は、Main symposium、Mini symposium、Poster sessionで、自分の実験に関連する分野の知識を得ることに主に費やした。特に、免疫に関連する分野は大きな賑わいを見せており、会場の許容人数に収まらないこともあるほどで、世界の注目を肌で感じることができた。また、現時点での興味を幅を広げるため、遺伝分野に関する講義も積極的に聞くように努めた。また、最終日はもちろんのことだが、別日でもPoster sessionには進んで参加し

た。そこでは、私と同年代の研究者が、流暢な英語で迫力のあるプレゼンテーションを行っているさまを目の当たりにすることができ、良い刺激となった。ポスター発表でありながら、論文級の仕上がりを見せているものも数多くあり、目から鱗が落ちる思いであった。英語での意思疎通は不安であったものの、ある程度は他の発表者のポスターについて質問することができたように思う。学部生で発表を行う人はほとんどいないように見受けられたが、さほど年齢の離れない研究者との数多くのディスカッションの経験は、今後必ず活きたときがあると確信している。さて、私のポスター発表であるが、注目度の高い免疫の分野であったこともあり、時間いっぱい、数多くの質問を受けることができた。今後どのような方向性で実験を進めていくかということに関しても有用な示唆を受けることがあり、短時間の議論のなかでも、非常に感慨深いものがあった。しかし、データをどのように配置し、いかなる文面で訴えていくかということに関しては、まだまだ改善の余地があったように思うので、忘れず次に繋げていきたい。

助成金を受けたことで金銭面の心配がなくなり、非常に晴れ晴れとした気持ちで学会に参加することができた。しかし、これほど多くの研究者が尽力しても、なかなかブレイクスルーの起こらない「癌」という病は、やはり対処しがたい難敵なのであろうことを実感した。また、同一分野の研究に数多くの人々が実験に取り組む中で、頭一つ抜けた実績をあげるのは困難であるという考えに思い当たり、これまで以上に真摯に実験に取り組まねばならないと痛感した。私は5回生という立場であり、日々の生活のなかでは実際に病棟に赴き、ベッドサイドで臨床的な知識ならびに経験を学ぶことが本義ではあるが、臨床ではなくやがて研究が本分になりうるということを考えれば、この貴重な学生という時間ある身分を、それだけに費やすだけであってはならないであろう。基礎医学の知識、論文の読破、実験の経験、コミュニケーション能力や英語での表現力といった能力を、総合的に養っていかねばならない。このことを口で言うのはいかにも容易い。しかし、日々の学びの場における自分の生活を今一度見つめ直し、より一層のハードワークを心掛けていけばやがて道は通ずると信じたい。このようなモチベーションを私に授けてくれた今回の経験は、京都大学教育研究振興財団とその寄附者様方、ならびに京都大学医学部附属病院乳腺外科学研究室、医学部教務の関係者の皆様方のお陰である。改めて深く感謝の意を表し、これを結びたい。このような機会をいただいたこと、関係者の皆様方に心より御礼申し上げる。